

千刈キャンプ60周年を前に

川 島 恵 美

関学には、西宮上ヶ原、西宮聖和、神戸三田、大阪梅田、東京丸の内、宝塚、千里国際の7つのキャンパスがあります。そこでは、約3万人の児童、生徒、学生、そして教職員が毎日を過ごしています。さて、関西学院には、これら全ての人々に開かれたもう一つのキャンパスがあることをご存じでしょうか。その場所は、三田にある関西学院千刈キャンプ、いわば森のキャンパスです。千刈キャンプは来年、開設60周年を迎えます。関西学院とキャンプの歴史は古く、すでに旧制中学の時代から「三日月キャンプ」と名付けられた祈りのキャンプが教育の中に組み込まれ、その伝統は今も脈々と続いています。1955年に千刈キャンプが開設された時は、学院の宗教活動委員会が原動力となって、水もなく、木も少ないはげ山のような土地をワークキャンプで開墾していったと聞きます。飲料水の不足に対して貯水ダムを建設し、また様々な経緯を経て1984年にセンター棟が建築され、キャンプという名前ではありますが「文化的孤島」ともいえる、日常生活を離れ、様々な活動を通して学び、澄み切った森の空気の中で大いなるものの存在を感じながら自らをふりかえるのに相応しい場所となっています。千刈キャンプは、“Mastery for Service”を具現化する教育施設としての存在意義を持つものですが、それは、千刈キャンプにかかわる全ての教職員、学生リーダーらが“Campers First”という合い言葉でもってキャンプを支えてきたことで可能になっています。私は、在学中には千刈キャンプに行く機会がなかったのですが、卒業してから前事務長の岡さんとの出会いをきっかけに、ここ20年ほどはユーザーとして、運営委員として、また2010年度からは所長として深く千刈にかかわってきました。特に、2009年度以降、学院全体の財務改善要求の流れの中で、千刈キャンプにも様々な変化を余儀なくされる状況が生じています。

開設60周年を迎えるにあたり、改めて30周年誌、50周年誌をひもとけば、多くの先達によって守られてきた、様々な変化の中で失ってはいけない千刈キャンプのスピリットがあることを痛感します。未来の千刈キャンプのあるべき姿を心を据えて考えていかなければならないと思っています。

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。

わたしの助けはどこから来るのか。

私の助けは来る

天地を造られた主のもとから（詩編 121:1-8）

（人間福祉学部准教授）